

くらし

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

「高性能四輪駆動車、ガソリン無ければただの箱」。少し自虐的なこの言葉。私たちは身にしてみていた。

1993年。当時のパリ・ダカールラリーで何度も好成绩を上げていた三菱パジェロ2台をモンゴルに運び、モンゴルからは大砲けん引用のロシア製軍用四輪駆動トラックも参加して、林原—モンゴル共同調査隊はゴビに挑もうとしていた。ところが、ガソリンがなかなか手に入らなかつたのである。

民主化後の経済的に困難な時期で、ガソリンの流通は管理されていた。私たちは首都でガソリンの配給券を手に入れなければならなかつた。ゴビ砂漠の主要な町にもガソリンスタンドはあつたが、肝心のガソリンがないことがしばしば。タンクローリーが到着するまで何日か足止めになることもあつた。

今は事情が劇的に良くなった。地方の村でも普通にガソリンを購入できる。給油はもちろん電動で日本と同じ。でもそれを当たり前のように思っている学生を見ると、「昔は手回し給油装置を隊員交替で回さねばならなかつたんだよ」など

⑤ ゴビ砂漠ガソリン事情



ガソリンスタンドで給油を終えた調査隊の車両。「ゴビ砂漠のガソリン事情はずいぶん良くなった」

と言いたくなるのは年をとった証拠かもしれない。

ところでつい最近、9月22日にウランバートルで、旧ソ連のモンゴル古生物学調査70周年を記念する国際シンポジウムがあり、ゴビ砂漠で調査をしてきたモンゴル、ロシア、ポーランド、アメリカなどの研究者と話す機会があつた。その時、

入手に苦労も劇的改善

ということであつた。

日本に帰ってから、94年前のアメリカ自然史博物館の調査時のガソリン事情はどうだったかと調べてみた。当時は自動車というものが一般に出始めたころである。彼らは最も耐久性があると評判だったダッジ社の車を使い、探検に車を導入したという意味では先駆的な隊であつた。

調べてみて驚いた。何と彼らは1回の調査で1万5千リットルのガソリンを使い、しかもそれを100頭以上のラクダで運んだのである。探検記には車のトラブルがよく出てくる。にも関わらず、車による調査は効率がよく大成功とある。

本当かな? 「ああ、ガソリンの要らないラクダでやればよかった」が本音では? と私はひそかに想像している。

(岡山理科大教授)

＝ 随時掲載